

「もう、つぎに行こう。美術館は広いから、	時間がなくなっちゃうよ」	美羽はそわそわした。その場から早く立ち	去りたかった。	「静かにしてよ。まだ見ているんだから」	渉はさっきから、一枚の絵の前から動こう	としない。	「ねっしんに、なにを見ているの」	「右のすみっこにいる、このトビウオ」	「どうして、それが気になるの」	「トビウオのお姫さまは、王子さまが船から	落としたくつ下を探しているんだ」	美羽はおどろいた。	「どうして、トビウオがお姫さまなの。どう	して、王子さまはくつ下を落としたの」	「ねえ、美羽ちゃん」	渉はうんざりだというように、大きな声を	だした。美羽はあわてて、しいっと、人差し	指をくちびるにあてた。	「渉くん、美術館では静かにしよう」
----------------------	--------------	---------------------	---------	---------------------	---------------------	-------	------------------	--------------------	-----------------	----------------------	------------------	-----------	----------------------	--------------------	------------	---------------------	----------------------	-------------	-------------------

「美羽ちゃんは、質問ばかりだね」	「ごめん」	美羽はとっさにあやまった。渉はなまいき	だ。それに、想像力がゆたかだった。美羽は	ときどき、うらやましく思う。	美羽にとって、この絵はどちらかといえ	たいくつな印象だった。夜空に満月が輝いて	光が海の中へ差し、そこに魚が泳いでいる。	空と海のあいだで、ジャンプするトビウオの	群れがアーチをつくっていた。ていねいに描	かれてはいるけれど、とくべつに上手いわけ	ではなかった。	渉がお姫さまといったのは、群れを離れて	一匹だけ海の底にいるトビウオだった。まさ	か、これを見てトビウオのお姫さまだと思	なんて。しかも、絵には描かれていない船や	王子さまや、くつ下を想像するなんて。美羽	には思いつきもしなかった。	なんていうのか、渉はそう、ロマンチック	なのだ。
------------------	-------	---------------------	----------------------	----------------	--------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	---------	---------------------	----------------------	---------------------	----------------------	----------------------	---------------	---------------------	------

の	賞	ない	「わ	な	美	あ	か	「ま	渉	を	さ	「ご	ま	「こ	美	「う	絵	「ま	「ぼ
り	に	い	た	と	羽	あ	ら	ま	は	お	き	め	た	この	羽	う	は	まだ	く、
ぼ	選	か	し	き	ち	あ	な	さ	あ	こ	き	めん	質	絵	は	う	た	まだ	こ
ん	ば	な	は	だけ	や	あ	い	か	き	す	に	「	問	の	は	ん	く	まだ	この
が	れ	。賞	あ	、	ん	ふ	の	、	れ	と、	あ		を	ど	ふ	こ	さん	美術	絵
か	る	だ	ん	お	と	き		お	た		や		し	こ	く	の	あ	館の	が
け	と、	っ	ま	姉	名	げ		姉	よう	う	ま		て	が	ぎ	絵	る	入口	い
ら		ても	り、	ち	前	ん		ちゃん	う	さ	っ		しま	す	つ	が	んだ	よ。	ち
れ	キ	ら	こ	ゃ	で	だ		は、	に	く	て		った	きな	な	い	から		ぼ
る	ャ	っ	の	ん	呼	ん		こ	た	て	か			の	持	この			ん
け	ン	て	絵	と	ぶ	い		この	め	かな	わ				ち	ばん			す
れ	バ	ない	の	いう	け	う		絵	息	な	ない				だ	す			き
ど、	ス	し	よ		ん	弟		の	をつ	わ					て	き			だ
こ	の	「	さ		か	は		よ	いた		かん				き	だ			な
の	横		は		に	わ		さ			し				だ	よ			「
絵	に		わ		り	た		が			やく				「				
に	つ		か		そう	し		わ											
は	き		ら		う	を													

美羽はぽそぽそとつぶやいた。	「わたしがこの絵を描きました」	またびつくりしたようだ。	え、という顔をして、渉は立ち止まった。	「ここに、います」	白状することにした。	どきつとした。美羽はたまらなくなっていて、	描くのをやめてしまいかもしれない」	れなかつたんだって、かなしくなっていて、もう	に伝えなきや。そうしないと、だれも見てく	「だめだよ。あなたの絵がスキだって、すぐ	「渉くん、待って。あとにしようよ」	ひっぱって、出口へいそいだ。	いい終わらないうちに、渉は美羽の手を	ためのノートがある、はず、だけど」	「ええ、あの、出口のところに、感想を書く	賞だって伝えなきや。どうすればいい」	「たいへんだ。この絵を描いたひとに、一等	渉はびつくりしたようだった。	なに色のりぼんもなかった。
----------------	-----------------	--------------	---------------------	-----------	------------	-----------------------	-------------------	------------------------	----------------------	----------------------	-------------------	----------------	--------------------	-------------------	----------------------	--------------------	----------------------	----------------	---------------

き	の		た	の	き	の	に	朝		に	は			「美	飾	込	は	ば	夏	
り	星	た	絵	先	上	時	ぎ	早	こ	、	ね	渉	美	羽	っ	み	い	ん	休	中
と	が	し	だ	生	げ	間	り	く	の	美	た。	は	羽	ち	て	さ	え	大	み	学
明	輝	か	と	は	た	を	を	起	絵	は	年	す	は	ゃ	も	え	き	に	校	の
る	く	に	評	お	の	学	ほ	き	を	目	の	ご	は	ん	ら	忘	な	美	の	美
く、	夜	不	し	砂	だ	校	お	て、	たい	の	離	い			え	れ	術	絵	部	
ひ	の	自	た。	糖	っ	の	ば	、	く	が	た	ご	い	、	と	な	館	を	に	
る	に、	な	皮	を		術	な	お	つ	じ	小	い	と	す	説	で	展	描	所	
ま		絵	肉	ま	完	室	が	弁	だ	ん	さ	っ	ね		明	展	示	いた。	属	
の	海	で	だ	ぶ	成	で	ら、	当	とい	と	な	て、			を	部	す	。	す	
よう	底	あ	と	した	した	過	夏	を	った	し	弟	そ			受	員	る	秋	る	
だ	の	っ	わ	た	絵	ご	休	じ	た	た	の	の			け	な	た	に、	美	
っ	ほう		か	よう	を	し、	み	ぶ	のは	、	お	場			て	く	め	、	羽	
た。	ま	空	っ	な	見て、	こ	の	んで	は、		な	で			いた。	ても	だ	街	は、	
そ	まで	は	る。	き	、	絵	ほと	作	嘘		言	と				も	っ	で	今	
れ	は	満		ら	顧	を	んど	っ	だ。		葉	び				申	と	い	年	
で	っ	天		し	問	描		お								し	と	ち	の	

「美羽ちゃん、ぼくに質問してよ」	渉はふまんげな顔で、美羽を見上げた。	笑った。	美羽は、泣きたいい気持ちをごまかすように	てあるのがたくさんあるから」	「渉くん、他の絵も見てみよう。上手に描い	特別賞の銀色のりぼんが輝いていた。	上の絵には佳作の赤いりぼんが、下の絵には	の絵の上と下にも他の生徒の作品があった。	壁に、絵は縦に三枚ずつ並んでいる。美羽	れていた。	い目の高さの位置に、美羽の絵は堂々と飾ら	まいたい。よりにもよって、いちばん見やす	恥ずかしくなった。いつそ、壁から外してし	では、じぶんの絵はなんてへたなのだろうと	に展示され、他の学校の生徒の絵を見たあと	しまったとかかんじた。いま、こうして美術館	たとき、じぶんの絵のいいところがかすんで	だけど、同じ美術部の生徒の絵と並べて見	も、美羽はこの絵にまんぞくしていた。
------------------	--------------------	------	----------------------	----------------	----------------------	-------------------	----------------------	----------------------	---------------------	-------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	-----------------------	----------------------	---------------------	--------------------

い	す		「	「	ち	ほ	「	な		に	「	発		し	「	わ	「	ば	
っ	る。	口	ク	王	ょ	ら	ど	っ	そ	見	ト	想	美	た	だ	か	じ	か	美
た。		を	ル	子	っ	、	う	ち	れ	え	ビ	が	羽	す	っ	る	ゃ	り	羽
	美	は	ー	さ	と	靴	し	や	だ	る	ウ	だ	は	て	、	の。	あ	す	は
	羽	さん	ザ	ま	ふ	じ	て、	う	と、	っ	オ	い	思	ト			ど	る	と
	は	だ	ー	は	し	ゃ	王	け	ト	て	の	す	わ	ビ	ウ	テ	う	な	ま
	声	の	に？	小	ぎ	な	子	ど。	ビ	こ	ひ	き	ず	ウ	オ	ィ	し	っ	ど
	に	が		型	だ	く	さ	で	ウ	と	れ	だ。	笑	つ	つ	ア	て、	て	っ
	は	わ	王	の	な	て、	ま	も、	オ	ね。	が、		顔	て	き、	ラ		い	た。
	だ	る	子	船	っ	く	は	す	は	なる	優雅		に	い		も	い	な	に
	さ	か	さ	に		っ	く	て	み	ほ	な		な	る	つ	つ	た	そ	よ、
	ず	っ	た。	乗		下	っ	き	ん	ど	ド		っ	そ	け	け	う	う	、
	に、			っ		っ	下	だ	な		レ			で	て	い	だ	っ	さ
	ご	渉	に「	て		て	を	な。	お		ー		渉	の	い	ない	っ	た	き
	め	が		いた		いう	落		姫		プ		の	こ	の	に	の	に。	は
	ん、	む		んだ		のが、	と		さ		の		う	う	ひ	「	に	に。	質
	と	っ		「			した		ま		そ		い		ひ				問
		と					の。		に		で		う		ら		と		

「も	に、	そ	学	「ど	あ	あ	今	い	「ト	わ		落	ち	「そ	「海	い	く	浜	「そ
し	ひ	こ	校	う	れ、	い	年	っ	ト	か	く	と	が	う	で	き	つ	辺	う、
か	と	ま	に	い	き	だ、	は	し	ビ	ら	つ	し	い	い	は、	が	下	を	、
し	り	で		う	ゆ	ひ	王	よ	ウ	な	下	て	い	う	く	だ	を	散	船
て、	で	い		こ	う	と	子	に	オ	か	が	し	か	こ	つ	い	は	歩	に
お	学	っ		と	に	の	さ	海	の	っ	、	ま	、	と。	下	な	いた	し	乗
姫	校	て、		な	ぐ	。	ま	で	お	た		っ	く	船	の	だ	て	て	る
さ	へ。	は		。	ち	お	ほ	学	姫	っ	渉	う	つ	で	ほ	ら	。	、	前
ま	そ	っ		お	っ	姫	た	校	ま	は	話	っ	下	は	う	か	き	あ	に、
っ	れ	と		姫	ぽ	さ	ら	へ	は、	を	を	か	を	は	が	ど	し	し	王
て、	っ	気		ま	く	ま	か	行	去	つ	づ	り	脱	だ	ロ	っ	た	を	子
わ	て	づ		は、	な	は、	し	っ	年	け	た	ね」	い	し	マン	た	靴	け	さ
た	も	いた。		ど	った。	、	て	て	は	づ	。		だ。	の	ン	だ	と、	が	ま
し	し	。		う		ば	、	ん	王	け			。	ほ	チ	と、	し	は	は
？	か	夏		し		っ	夏	だ	子	た			そ	う	ッ	ふ	た	だ	し
」	し	休		て		か	休	。	さ	。			れ	が	ク	ん	か	ら	で
	て。	み				り	み	、	ま				を	気	？		ら、		
						で」	の		と				海	持	」				

こ	ト	つ		眺	し	は、	く	い	に	目	れ	水	乗	に	を	南				「
そ、	ビ	けた。	美	めた。	か	砂	つ	だ	な	を	た。	し	っ	く	踏	の	去	渉	ぼ	
渉	ウ	た。	羽		見	浜	下	く	た	き	は	ぶ	て	つ	ん	島	年	は	く、	
は	オ	美	は		た	に	は	つ	そ	ら	ま	き	沖	下	で	へ	の	い	さ	
嘘	を	しい	この		こと	寝	探	下	の	き	ば	を	へ	を	ふ	行	夏	じ	み	
で	見た	夜空	絵に		の	ころ	した	の	と	せ	た	な	だ	は	き	っ	休	け	し	
は	とい	と、	『あ		い	が	けれど	片	きに、	な	き	が	ト	、	ん	ひ	に、	顔	っ	
なく、	う	輝	の		満	っ	見つ	を	船	が	も	、	ビ	そ	だ	る	家	で、	た	
一	同	く	夏		天	、	から	海	が	き	せ	ア	ウ	の	っ	ま、	族	美	ん	
等	じ	海	の		の	プ	な	へ	大	げ	に	ー	オ	あ	た。	渉	旅	羽	だ	
賞	思	と、	思		星	ラ	か	落	き	ん	そ	で	の	と	け	は	行	を	よ	
だ	い	き	い		空	ネ	っ	と	く	よ	れ	歓	群	ク	が	浜	で	見		
と	出	ら	出		を	タ	な	し	揺	く	を	迎	れ	ル	を	辺	海	つ		
い	あ	め	』と		い	リ	か	ま	れ	は	見	し	が	ー	し	で	の	め		
っ	る		題		っ	ウム	った。	っ	、	だ	い	て	ら	ザ	な	貝	き	た。		
て	か	め	を		し	で	夜	た	脱	し	た	く	め	に	う	が	れ			
く	ら	く			に											ら	い			

に	美	「よ	美	り	「で	あ	ほ	い		美	に	「感	た	だ	フ	完	い		れ
ぎ	羽	ろ	羽	ま	では、	た	ん	っ	こ	羽	入	想	こ	だ	ォ	成	た	じ	た
っ	は、	こん	は	し	は、	ら	と	し	の	は	っ	を	と	か	ル	さ	ト	つ	の
た。	え	で。	う	よ	く	し	う	よ	絵	心	て	あ	は、	ら、	メ	せ	ビ	は、	だ
	へ	ト	や	う	つ	い	に	に	を	か	い	り	あ	、	し	た	ウ	、	ろ
	へ	ビ	や	か	下	思	よ	見	描	ら	る	が	あ	、	た	あ	オ	絵	う。
	と	ウ	しく		の	い	に	こ	い	う	ん	と	な	、	小	と、	は、	中	
	笑	オ	手		王	出	か	と	て、	れ	だ	う。	が	、	さ	、	、		
	っ	の	を		子	を	っ	が	美	し	よ	こ	こ	の	な	名	美	で	
	て、	お	差		さ	つ	た。	で	術	く	ね	の	の	ト	前	を	羽	一	
	そ	姫	し		ま。	ろ	来	き	館	て		ト	ビ	ウ	入	れる	の	匹	
	の	さ	だ		つ	う。	年	て、	に	笑		ビ	ウ	オ	れる	か	サイ	だ	
	手	ま	した。		ぎ		の	話	展	っ		ウ	オ	を	わ	わり	ン	け、	
	をし				の		夏	を	示	た。		オ	を	描	に、	に	だ	右	
	っ				部		休	聞	し			美	き	いた		す	っ	の	
	かり				屋		み	け	て、			羽	た	った。		み	た。		
					に		は、	て、	弟			に	た	絵		に	を	描	
					参		、		と			例	え	を					